少額であることなどが有力な理由にあげられているが，何と言っても教育の普及にともなう知的レベルの向上こそがその原動力ではなかったろうか。この基礎の上に明治以来約１００年間に外来の文化をよく吸収・消化して今日の活動や繁栄を可能ならしめた源泉を養ったものと考える。したがってその源は明治初年に行われた教育制度の確立であり，当時すなわち１９世紀の後半においては欧米の先進国さえも二，三の国を除いては教育は普及していなかった時代に，ここに着目した日本の為政者の高い識見と深い洞察力にはただただ感歎の他はない。その功罪についてはとかくの批判も多い明治の元勲達もこのことだけについてはわれわれ国民は永久に感謝銘記すべきであろう。実に明治５年に発せられたという〝邑に不学の戸なく，家に不学の人なからしめんことを期す〟との大号令こそは今日の日本を生んだ出発点であったとも言えよう。由来教育の事業にその重要性だけは十分に理解されていながら，何分その効果があらわれるのは数十年の後であるから，目先のことだけが取り上げられ，後まわしにされ勝ちであるが，上記のことはいかに国家の興隆と大きな関係があるかをブラジルの現状を直視して思いを新たにした次第である。

## 近況と感想

保　柳　睦　美

この４月から，急に立教大学に移りました。ここでは先生も学生たちも，お茶の水に劣らずよい人ばかりで，気持がよい毎日を送っています。しかし何といってもホッとしたことは，停年が２年ばかり延びたことです。都立大学でも停年までには，まだ２年ばかり残っていたのですが，少し前から，だんだんに追いつめられたような気がして困りました。停年に追いつめられるというよりも，停年までにこれだけの研究は完成しておかなければ，という気分に追われて，次第に気持に余裕がなくなってきていました。しかし私などは幸福な方で，もしこれに加えて停年後の生活の不安にまで襲われたら，どんなに暗い気持にとざされることであろうと，人ごとではない気がします。もっとも，これもみな自分が年をとった証拠です。

ところで最近は寿命が延びたから停年を延ばせという議論もあるようですが，これには無条件には賛成できません。動物的な寿命が延びたことは事実ですが，頭脳の生命も延びたという証明が，はたしてなされているのでしょうか。大学の先生には，これがいちばんの問題だと思います。頭の寿命がきているのに，大学の先生という職業の寿命だけ延ばしたことになったら，これは税金のむだだし，教えられる学生にも不幸なことです。ここに今後の私にも，また不安があります。だから頭の方もまだだいじょうぶだという証明を自分でやらなければならない。もちろんそれは学究方面のことで，いいかげんな評論や通俗本作りなどをやっていたのでは，ますます社会の心ある人々の

信用を失うだけです。

そこで考えた。若い先生たちの方が適当な研究方面はこれらの人に委せ，自分以外にはあまり取り上げられそうもない方面に研究をしぼったらどうであろうかと。そこで次に具体的にこの方面のことを考えてみると，あまりにも多いのに驚きました。戦後の日本では地理学者の数が激増したのに，これはどうしたことでしょうか。つまり多くの人々が同じようなことばかりをやっているので，その反面では空白な部分が方々に出てきてしまっていることを意味します。これは日本の地理学の不健全さを示すものでもあります。たとえば日本の都市化・工業化・社会・経済などの現象を地理学の立場から取り上げることは，たくさんの人がやっていますが，その反面ではアジア，ことに中国の地理，日本人の地理知識や地理思想の発達，地図の発達などに関する研究は，ほとんどとまっています。だからこういう空白を埋めようと頑張っていますが，ともすれば1人ではどうにもならないとの絶望感に陥りそうです。現在の私の最大の願いは，日本の地理学界の人々が，もっと分野の広い，しかも近視眼的ではない基本的研究に目ざめて，健全な学究的遺産を次の代，次の代へと伝えて行くことです。

## コルネリア・ファン・ナイエンローデという女性

別　技　篤　彦

ある日私はジャカルタの古本屋で一冊の黄褐色の本を手にいれた。題して〝東インド会社時代の女性たち〟という。オランダの東インド会社が花やかなりし17，18世紀ごろ当時のバタビア（今のジャカルタ）の社交界で活躍し，いろんな意味で話題をのこした女性たちの伝記である。読んでいくうちにその1人にコルネリア・ファン・ナイエンローデの名が現われてきたのに私は驚ろかされた。彼女は日本の平戸の半田五右衛門の義理の娘で日蘭混血の女性であり，今も平戸の半田家に残る〝じゃがたら文〟の筆者だからであった。

彼女は元和～寛永にわたって駐在した平戸のオランダ商館長ナイエンローデを父とし，日本人（のち半田五右衛門の後妻）を母として生れた。父の死後妹とともにバタビアへ渡り，そこで長じてオランダ生れの商務官ピーテル・クノルと結婚し，たくさんの子供を生んだのである。コルネリアはたのもしい女性で一方に父の頑固な性質をうけたが，他方母からは美しいものを愛する東洋的な心を与えられた。大へんな激情家で自分の所信は容易にまげなかったらしい。コルネリアが一度怒るとその口からは激しい日本語が立てつづけに飛び出し，家中のものが震えあがったという。しかしその一面では彼女はどこまでも日本を忘れなかった。平戸にいる生母をたえず慕い，音信を欠かさなかったことは彼女の〝じゃがたら文〟でも明らかである。そして船便のあるごとに異国のめ